

運転免許證

赤谷慶子

米國在住の頃、我は十六歳にして運転免許證を取得したり。理由は明解にて、父の赴任地首都ワシントンは一九六十年代當時交通手段少なく、バスは一時間に一本たらず。現在は地下鐵網充實してあり。通學は通常スクールバスにて朝夕迎へありたり。十六歳になりし時、父の都合により私立のミッシヨン系學校へ通ふ事になりき。スクールバスはなく、交代にて親の運転する乗用車にて近隣の子女の送迎をす。我が両親多忙なるによりて、すなはち娘に自ら運転せよと思ひ立ちたるなり。當時ワシントンは十六歳にて免許取得可能なりき。假免許は筆記試験のみにて、甚だ手易きこと世に喧伝せらる。その後、年齢二十五歳以上の免許證持つ成人付き添へば、運転を許さる。更に假免許證の期間内に「訓練」ありたれば試験場へ赴き、試験官同乗のうえ、縦列駐車等ある一定の「技術」を見すれば免許證を取得するを得。日本にてはあるまじき簡素なる行程を經、晴れて免許證を取得せり。その訓練期間は、吾に取りては受難の時なりき。父は大いに車好きにて、二年に一度二台ある車を新車に乗り替ふる所謂「カーキチ」。我練習台として運転せしは、五段フロアシフトの當時のダットサン・初代フェアレディ。米國産の車に比し、扉薄く、他の車通りたれば揺るる軽量車、運転にひとかたならぬ難儀あり。加へて父は運転技術に煩く、エンジンの回轉數RPM、しかじかの數値に達せざれば、ギアを變ふる事能はず等、初心者に取りては途方もなき無理難題をふつかくる。車の前方確認、ギアの変更、アクセルとブレーキの強弱等、此處彼處に気を配るだに精一杯にて回轉數云々等論外なりき。さて免許取得の日は父の愛車フォードのサンダーバードを使ひき。車幅廣く、小柄なる十六歳の我には車の先端は見るを得ず、運転席の逆側も見えず。縦列駐車は練習の甲斐ありて、上手く駐車位置に收む。その他問題若干ありしも、車番の外交プレートなるが功を奏したりや、試験官我を合格にす。

二年後歸國し、東京都内を運転するは恐怖なりき、ハンドル位置の異なる車にて、右折すれば反對車線に迷ひ入り、慣るるまでの難儀、筆舌に盡し難し。最近、先輩の多く免許證返上を始めてをり、我は五十五年も運転を續けたりと気が付く。その長きに人事の如くに吃驚せり。我趣味のひとつはゴルフにて、そのためにも八十五歳までは運転せまほしと考へたるが、如何にかなるらむ。

(平成三十一年一月二十七日受附)